

～空前のサーモン養殖ブームに乗り遅れるな！～

平成31年地域政策研究センター 地域協働研究【ステージ I】採択課題

課題名：先発産地をキャッチアップするためのマーケティング戦略に関するフィージビリティースタディー

研究代表者：総合政策学部 教授 山本健

課題提案者：岩手県内水面水産技術センター

研究メンバー：山本健（総合政策学部）

技術キーワード：震災復興、ご当地サーモン、魚類養殖

▼研究の概要（背景・目標）

全国に広がるサーモン養殖ブーム

海面養殖用種苗に対する需要拡大

ギンザケ種苗供給の実績と技術面での優位

資金面、人材面から投資負担に耐えられない

需要地から遠く輸送コストだけ不利

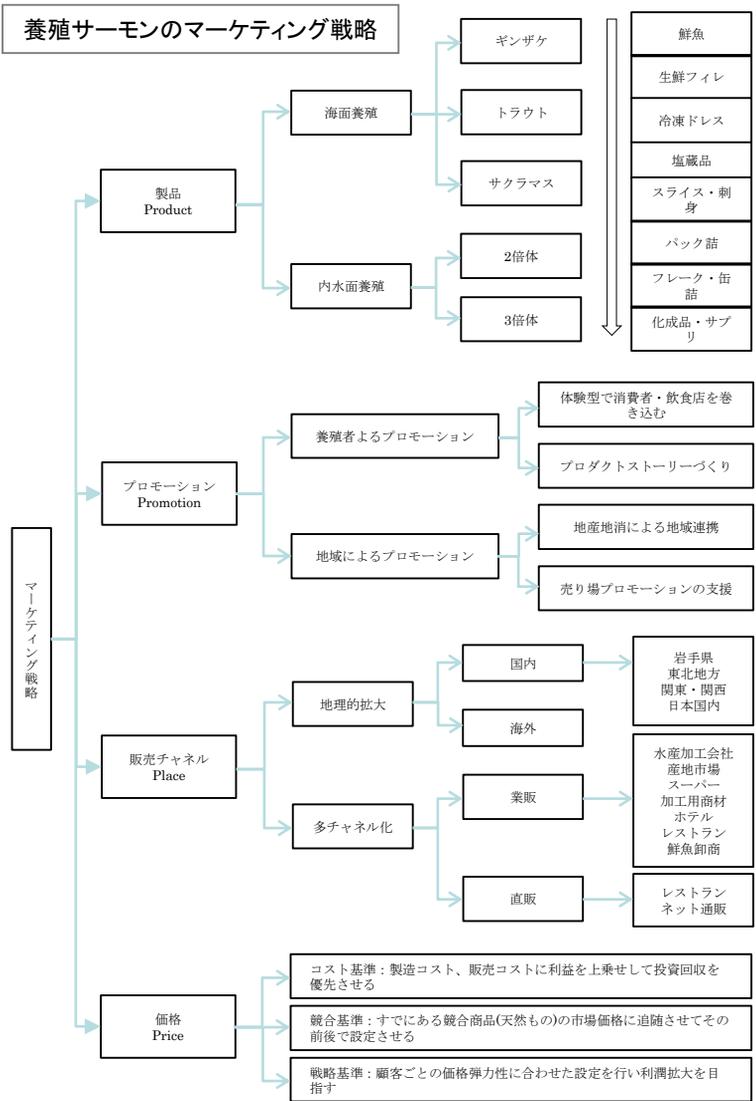
三陸漁業の中核魚種である秋サケの不漁

▼研究の内容（方法・経過）

1. 安曇野市（長野県）、高松市、東かがわ市（香川県）、田原市（愛知県）、石巻市（宮城県）、南あわじ市（兵庫県）、琴浦町、境港市（鳥取県）、八幡平市、盛岡市、宮古市、久慈市、大船渡市、大槌町（岩手県）
2. 養殖用種苗生産の先進地におけるフィールドワーク、ならびに関係者に対するインタビュー調査
3. 調査期間：2019年4月～2020年3月

▼研究の成果（結論・考察）

- ・ 県内各地における海面養殖の展開
久慈市、宮古市、大槌町で本格的な海面養殖がスタートして、今後数年内に数千トン規模の生産量が見込まれる
- ・ 内水面養殖事業者の課題
養殖種苗に対するニーズは高まる一方、施設・設備や人員の増強、へい死リスクの増大、需要の季節変動といった経営課題に直面する



▼おわりに（まとめ・今後の展開）

岩手県におけるサーモンの海面養殖の生産目標値を年間5,000トンと仮定すると、海面増重倍率を5倍、飼育歩留まりを70%、種苗サイズを一尾当たり400g、出荷サイズを一尾当たり2kgとすれば、必要な種苗は約360万尾、重量にすると1,430トンが必要となる。現時点における生産量はその10分の1程度であり、供給能力の大幅な増強は不可欠である。ハマチやカンパチの裏作として西日本を中心に数十から数百トン単位の生産規模で広まったサーモン養殖は、大手水産会社や海外の投資ファンドが経営主体となって、数千トンから数万トンの規模での展開に進みつつあり、大規模な養殖の適地に恵まれる岩手県ではさらなる需要の増大が期待される。

一方で海面養殖用種苗のサイズは400g程度であり、200g程度で出荷している多くの内水面養殖事業者の施設やマンパワー、ノウハウで増産ニーズに応えることは容易ではない。また11月～12月に出荷のピークを合わせるためには水温上昇によるへい死リスクが高くなる夏場に大量の在庫を抱えなければならず、中小零細規模の事業者が負担するには過大である。リスクシェアの観点からも需要の平準化のためにも海面養殖事業者との深い連携が不可欠である。